

# 巻頭言

## 和歌山県は 歩いてめぐる観光地の宝庫！

名古屋大学 大学院 経済学研究科 教授

齊藤 誠



私は、旅行や登山が大好きである。移動の原則という少し大げさであるが、公共交通機関の利用と歩行の励行を基本ルールとして自分に課している。マイカー、タクシー、観光バスを使う移動に比べれば、はるかに時間がかかるし、歩かなければならない分、体力も必要となる。

だから、私と一緒に旅行をすると、同行者は災難である。この8月も、妻とスエーデンを旅行したが、妻の万歩計は、毎日、2万歩超を数えた。夕方になると、くたくたになった妻とは喧嘩ばかりだった。それが、楽しい旅の思い出ともなった。

公共交通機関を使えば、地元の人たちと同じ視線で周囲を見渡すことになる。訪れた場所を歩いて回れば、行き交う人たちと触れ合う機会もできる。土地勘が働かないところを歩くと、かならずとっていいほど、迷子になる。そして、地元の人に道を尋ねる楽しみにつながる。そうしたもろもろのことを含めて、旅情なのではないだろうか。

和歌山県には、私の旅のスタイルにぴったりの観光地が多い。昨年7月も、和歌山大学で講演があったのを機会に、いくつかの観光地を訪れた。

講演翌日、南海線で加太まで行き、そこから船で友ヶ島に渡った。島には、ハイキング

コースが整備され、明治政府が築造した5つの西洋砲台をめぐることができる。暑さの中、歩くのはなかなか難儀であったが、砲台跡の印象的な姿は、そこまで歩いてきた苦労を忘れさせるものがあった。

午後は、JR和歌山線に乗って橋本まで移動し、そこから南海高野線に乗り換えて九度山で民宿をとった。九度山は、真田親子が流された地でもある。翌朝、日が昇る前から、7つある高野参詣道の1つである町石道<sup>ちやういしみち</sup>を歩いた。途中、寄り道をしながら、7時間ほどの道のりであった。参詣道の終点にあたる大門を仰いだときは、なかなかの感動であった。

多くの人たちは、参詣道や巡礼路と聞くと、登山道のような険しさを思い浮かべるかもしれない。しかし、古代より、貴族から庶民まで数多くの人たちが救いを求めて踏み固めた巡礼の道は、実のところ、歩く人にとってもやさしい。

町石道も、実際に歩いてみると分かるが、徐々に高度を上げて、いつの間にか（といっても、健脚でも6時間はかかるが…）、大門にたどりつく。町石道は、空海が最初にたどった道といわれている。山を開くためにやってきた空海を案内した地元の人々は、難儀でない道中をと、大師を気遣ったのであろう。

熊野三社への巡礼路である熊野古道も、吉

野から熊野へ延びる大峰奥駈道おくがけみち（まさに険しい修験道）を除けば、旅人にやさしい道である。山頂に向かって垂直方向に高度を稼ごうとする登山道と、聖地に向かって水平方向に（とても長い）距離を稼ごうとする巡礼路は、同じ道でも別物と考えてよいであろう。

高野山から本宮大社への熊野古道は小辺路こへちと呼ばれている。一昨年末、小辺路の中間地点にあたる奈良県側の十津川から熊野古道を歩いた。途中、果無山脈はてなしの集落を通り過ぎるところは、あたかも天空の道を歩んでいる感慨があった。大社の大鳥居を見渡せる丘に立つと、さらなる感動があった。大社から1時間ほど歩くと、湯の峰温泉で旅の疲れをいやすこともできた。

『紀陽銀行経済情報誌』の巻頭にこうして文章を書いてきたが、これまでの記述は自分のことばかりで、和歌山のためにまったくなくていい。そこで深く反省して（?）、これからは少しでも和歌山のために筆をふるってみたい。

私のような旅人が高野山や熊野三社へいたる巡礼路を思う存分に楽しむことができるのも、地元の人々や自治体のおかげである。高野参詣道や熊野古道は、2004年に世界遺産に登録された。当然ながら、世界遺産に指定されたから、これらの巡礼路が整備されたのではない。地元の人々が長い歳月、守り続けた巡礼路だからこそ、世界遺産にふさわしいと指定されたわけである。

日本全国に古道や街道と呼ばれる数多くの古い道跡が残っているが、その多くは、時々風雨にさらされ、朽ちるにまかされている。それが、平安時代から人々が踏み固めた道を、現代に生きる私たちが安全に歩むことができるのであるから、奇跡のようなことなのかもしれない。

私が歩いたのが真夏や年末であったこともあって、あまり人に出会わなかった。しかし、春や秋には、田辺から本宮大社に向かう中辺路を中心として、中高年の巡礼者でにぎわう。

スペイン巡礼を兼ねた海外からの若者も歩いているそうである。

多くの日本人にとっては、高野山や熊野三社は、歳をとってから行く観光地だと思われるのかもしれない。50歳、60歳を過ぎて訪ねるとなれば、歩くのは躊躇され、マイカーか、観光バスの利用となるであろう。しかし、それでは、巡礼路を楽しむ醍醐味が失われてしまう。とても残念である。

私が、「和歌山のために」、声を大にしたいことは、「若い人たちにこそ巡礼路を楽しんでほしい」というお節介である。

若い健脚であれば、旅人にやさしい巡礼路は、険しい登山道よりも楽であろう。おまけに履き慣れた靴と使い慣れたリュックがあればよいから安上がりである。地元の宿の人たちは、自らの脚で歩いてきた老若男女を実にやさしく迎えてくれる。

もちろん、いくら旅人にやさしい道とはいえ、巡礼路を歩くとなれば、事前の準備（巡礼路の下調べ、熊鈴を含めて装備や天候のチェック、体調管理など）が大変である。でも旅支度も旅の楽しみであろう。ただ、歩いていると不測の事態に出会うかもしれない、並行して走る公共交通機関を調べておく必要がある。万が一の場合、車道と接するところでタクシーを呼ぶことを考えてもよい。

こうして書いてきて『経済情報誌』の関係者の方々にも許してもらえるのかもしれない。私としても安心して筆を置くことができる。



本宮大社の大鳥居